

# 《関西サロン 2011 年 4 月例会報告》

【日 時】 2011 年 4 月 26 日 (火) 19:00~21:00 (引き続きチャリティ・オークション、懇親会)

【会 場】 SupportersField

【参加費・支援金】 1000 円 (全額を財団法人日本サッカー協会を通して寄付します)

※懇親会 2 ドリンク 1,500 円。追加のドリンクとフードはキャッシュオン。

ドリンク売上のうち、1 杯につき 200 円は寄付します。

※91,021 円を東日本大震災サッカーファミリー復興支援金として日本サッカー協会に寄付。

・オークション売上: 52,021 円 ・参加費: 31,000 円 ・ドリンク売上 200 円×70 杯 14,000 円

【演 者】 小田尚史、草葉達也、下藪昌記、永田淳 (五十音順、敬称略)

【テーマ】 「サッカーのチカラ」

【参加者 (会員) 9 名】 伊藤禎治 (サッカースクールコーチ) 賀川浩 ((株)シックス) 貞永晃二、佐藤英男、添島一輝 (フリーター) 根本いづみ (ライター) 福西達男 (ポルベニル カシハラ) 本多克己 ((株)シックス) 宮川淑人 (枚方 FC)

【参加者 (未会員) 23 名】 雨堤俊祐、尾崎雅夫 (関西大学サッカー部後援会) 市田利夫 (関西大学サッカー部後援会) 屋繁男 (関西大学サッカー部後援会) 中川加奈 (関西大学サッカー部後援会) 中川伸吾 (関西大学サッカー部後援会) 児玉知久、坂井大吾 (オクノ歯科) 玉井茂 (佐竹台 FC) 恒本ひろし (ガンバ大阪サポーター) 中村真也 (読売連合広告社) 疋田晴巳 (FC 大阪) 平井智之、福井ケント、ベン・メイブリー、丸関雅史 (ヴィッセル神戸サポーター) 吉澤正悟 (KNT) 吉村雅浩 (構成作家) 河野博文 (ロンヨンジャパン) 山本真也 ((株)スパークル) 新谷奈生 (ガンバ大阪サポーター) 上田里美、佐々木弘 (木曜 S.C※懇親会から)

注) 参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書はあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

【報告書作成者】 根本いづみ

---

## サッカーのチカラ

---

### 【目次】

- ◆はじめに
- ◆小田尚史
- ◆下藪昌記
- ◆永田淳
- ◆草葉達也
- ◆会場からのコメント
  - ・賀川浩
  - ・山本真也
  - ・セニョール佐藤 (佐藤英男)
  - ・ベン・メイブリー
- ◆編集長: 中林良輔コメント (寄稿)

---

## ◆はじめに

本多克己：サロン 2002 というのは、スポーツでよりよい社会をつくっていこうということをテーマに、毎月東京で月例会をしています。関西でも年4回を目標にこうして集まっているのですが、このたびの震災にあたり何かアクションを起こせないだろうかということで、「サッカーのチカラ」というチャリティ電子書籍の執筆者4名に、「サッカーのチカラ」をテーマにお話を頂きます。

サロン 2002 では宮川淑人さんを中心に、「元気プロジェクト」を展開しています。これは、被災地で自分が所属するサッカークラブが活動をやめていたり、あるいは避難して関西に住まれている子どもたちにサッカーができる場所を提供していこうというもので、HP で受入れクラブを掲載しています。本日も、サッカークラブを運営されている方などいらっしゃるとお思いますので、そちらにもまたご賛同を頂き、受入れクラブとなって頂ければと思います。

さて、4名の皆さんにお話し頂く前に、今回の震災でお亡くなりになった方々に黙祷を捧げたいと思います。

### 【黙祷】

---

## ◆小田尚史

本多：重苦しい雰囲気になったところでお話しいただくのも申し訳ないのですが……しかも一番緊張している、今日のスピーカーの中で一番の若手ですけども、50音順ということでお話頂きます。エル・ゴラツのセレッソ大阪と徳島ヴォルティスを担当している小田さんです。よろしくお願いします。

小田：ライターとしては2009年から、エル・ゴラツでセレッソ大阪と徳島を担当させて頂いています。高校の先輩である本多さんから今回、電子書籍「サッカーのチカラ」の執筆依頼を頂いて、書かせて頂き、今日もこうして呼んで頂きました。初めてお会いする方ばかりなので自己紹介をしますと、中高は六甲学院、大学は関西大学でサッカーをずっとやってきまして……

本多：関西大学サッカー部の後援会の方々が、いま大きく反応されました（笑）

小田：大学はサークルだったのですけど（笑）。サークルの中でも週5回ぐらい活動してきて、卒業後も、ライター、記者になりたいくてスポーツ紙や一般紙を受けたのですがダメで、その後いろいろ、番組制作会社などで働きながら中途採用の道を模索している中で、エル・ゴラツというサッカー専門誌の中途採用で採用して頂いて、2009年からやらせて頂いています。どこかの記者からという形ではないので、ライターとしても3年目です。

僕が担当しているセレッソは、地震の翌日の3月12日からJリーグ再開前の4月22日までの期間で、Jリーグの中で最も活動日数の多かったクラブです。練習もほとんど、週にオフが1日あるか2日あるかという感じで毎日サッカーをやっていたので、個人的な感覚としては、震災というのがそんなにリアルには……映像を見て感じる部分とのギャップを痛感した期間でありました。選手もそういうことを話していました。実際にああいうことがあった現実と、いま自分たちが暮らしている現実とのギャップが、どうもうまく折り合いがつけられないという1ヶ月。そういう、関西は特殊な状況の中での1ヶ月でしたね。

ただ、とはいっても、私も阪神大震災があったときに中学2年で、西宮市に住んでいて、被災した側の人間であります。当時はサッカー部で活動していたのですが、電車が止まり自転車通学を余儀なくされたりする中で、学校に行ってボールを蹴っているときだけは何も他のことを考えなくて良かった。時間を忘れられる力がサッカーにはあるな——ということ、学生ながら思っていました。その後、実際に社会に出てから、サッカーのチカラ、サッカーにどういうチカラがあるのかというのを、こんなに真剣に考えた時期はなかったのですが……

阪神大震災のときに、じゃあサッカー界として何をやってたかをちょっと思い出してみたのですが……ま

あ自分が忘れていただけかもしれませんが、もちろん何かあったと思うのですが、サッカー界全体で何かをというのは記憶に薄いというのが正直な気持ちです。それに比べると、今回のチャリティマッチにしても、いろんなクラブのチャリティ運動にしても、積極的にというか、サッカーのチカラが発信されている感が伝わって来ました。

それは何故かという、その間にワールドカップ初出場があり、日韓共催のワールドカップもありました。ワールドカップやオリンピック、Jリーグといったイベントが日本全体で共有されてきた積み重ね、サッカーに対する人々の思い入れが、阪神大震災と今回の地震の間に色々あって、そうした人々のサッカーに対する気持ち、共有する部分が膨らんだのではないかなと思います。そういう意味では、サッカーが持つチカラが確実に増していることは確かだとは思いますが。

Jリーグ選抜と日本代表の試合、Jリーグ選抜に選ばれている選手には今までの歴史を感じさせるメンバーが並んでいたりして、その年その年の、一人ひとりのサポーターが選手に対して持つ思い入れみたいなものがあり、また、Jリーグが開幕してからの間に積み重ねてきたものもあったと思います。Jリーグ全体のサポーターの数も増えていると思うので、そういう意味では、サッカーのチカラは確実に増しているのかなという風に思いました。

とはいっても、ヨーロッパなどサッカーの歴史の長い国、夜やゴールデンタイムに（テレビで）試合が普通に流れている国に比べると、日本では全然、社会における位置の低い……低いというか、小さい面も否めないと思うので、そのあたりはこれからの積み重ねでまた、そういう立場になっていければなあと思うのですけど。

文化としてサッカーが担っていく部分を一つ一つ積み重ねていくことは、これからサッカー界に関わる人の努力だったり、気持ち次第なのかなと思います。なので、これからまたサッカーのチカラがより必要とされたり、サッカーで少しでも一人ひとりの元気が出たりという部分を少しでも増すために、日々小さなことをやっていると感じました。以上です。

---

## ◆下菌昌記

本多：続きまして、ガンバ大阪というより国内で有数のブラジルサッカー通の下菌さん……。まあセニョール佐藤さんの前でそう言うのはちょっとアレかもしれませんが（笑）下菌さん、お願いします。

下菌：みなさん初めまして、こんばんは。下菌といいます。いまご紹介して頂いたとおり、そこにいるセニョール佐藤を前にブラジルのことを語るのになかなか気が引けるのですけど（笑）。僕もほとんどが初めてお会いする方なので、簡単に自己紹介をさせて頂きたいと思います。

僕は1982年のスペイン・ワールドカップを小学校のときに見て、ブラジルサッカーにハマった、というか憧れました。自分がブラジルらしいサッカーに全く縁のない、根性と体力だけの選手だった反動でブラジルに憧れたのだと思いますが、それからずっとブラジルを追いかけてきました。

その中で、賀川さんという大先輩が専門誌などで書かれるのを、中学高校のときにずっと読んで、夢を膨らませてきた人間です。Jリーグができる前でしたし、サッカーで身を立てることができない、ライターで身を立てるという概念がない時代だったものですから、とにかく何かブラジルとの接点を持ちたいと考え大阪外国語大学のポルトガル語学科に進学して、まあ何となくブラジルに将来関わりたいなというぐらいでした。

実際、卒業していきなりサッカーを専門にしたわけではなくて、とある全国紙で新聞記者の真似事を4年ほどやっていました。ただ、このままずっと日本にいてもブラジルを専門にするのはなかなか難しいのかなという思いがあって、会社を辞めブラジルに渡りました。2002年のワールドカップの前にブラジルに渡り、4年半ほどブラジルに住んでいましたが、親の問題などもあり一時帰国をして、今ここに至ります。帰国後はガンバ大阪を中心に関西サッカー、ブラジル人選手・監督を取材しています。

今回、「サッカーのチカラ」というテーマで色んなライターさんと何か書かないかと話を頂いて、“たかがサッカー”ですけど“されどサッカー”という思いもありますから、何かしら自分なりに書けることがあるかなと思ひ、メジャーなライターが多い中で気が引けたのですが参加させて頂きました。

ガンバ大阪は被災地と縁がなく、被害を被っていたわけでもありません。だから僕は、何かしらそういった

動きじゃなしに、ブラジルに特化した話を書きました。自分が住んだ、サッカーが文化として本当に根付いているブラジルという国の、ここまでに至る歩みはすごい波乱万丈の道のりです。サッカー文化が成熟され、クラブがサポーターと歩んできた経緯がブラジルにはあるので、そういったものをちょっとまとめました。

日本ではブラジルのことを「サッカー王国」と呼んだりすると思うのですが、ブラジルそのものに「サッカー王国」という言葉はありません。そんな堅苦しい表現ではなく、彼らは基本的には自分たちのことを「サッカーの国」といいます。

ブラジルも、今でこそワールドカップなどで優勝して、自他共に認める、誰もがブラジルといえばサッカー——いや、もちろんこの中にはサッカーといえばヨーロッパだとか、ブラジルを認めない方もいらっしゃるのかなという気がしますけども——まあ、ブラジルといえばサッカー、世界の中でも有数のサッカー国だと思います。

ただ、成長過程の中では本当に色々と波乱万丈なことがありました。今は様々な名門クラブ、日本でおなじみのところもありますけども、そうしたクラブも、100何年をかけてサポーターと選手が二人三脚でサッカー文化をつくり上げてきました。日本ではJリーグが始まってまだそれほど、サッカー先進国というほどの年月は経っていませんが、その成長曲線というのは、僕はかなり早い進歩で上がってきたのじゃないかなと思います。

今回、未曾有の大震災が起きて、被災地のクラブや一般の方、単にサッカーだけでくくれないほど本当に大きな被害を受けています。サッカー界はいま基本的に、「サッカーのチカラ」というのか、サッカーで何か支えようと、支える立場であると思うのですが、逆に、上から目線で何かを助けるという形でなくて、こういった震災を機に、日本でサッカーを身近に、文化として根付かせるいいキッカケになると思っています。

もちろん、被災地にはスポーツ、娯楽などという状況じゃない方も当然いらっしゃると思います。一口に「サッカーのチカラ」とか、そういった理想だけですべて片付くものじゃないと思いますし、復旧さえままならない状況で復興などと先走ってということはできません。

ただ、震災直後に日本代表とJリーグ選抜がああいった形で試合をして、そこで一義的に意味があったのは、お金をしっかり集められたことが大事だと思います。やっぱり理想論だけを言っても仕方がないです。

ガンバ大阪のある選手も、「僕たちに今できることは、お金をしっかり集めて、実際に何か物を支援したり、そういった手助けをすることだ」と、非常に大人の意見を言っていて、それには本当に同意しました。

そうした中で、被災地ではないクラブに接している僕たちサッカー関係者は、仙台や鹿島、水戸など被害を被ったクラブを手助けするだけじゃなくて、サッカーを通じて何かしらサッカーを身近に根付かせるアピールをするチャンスじゃないかと思っています。

ブラジルも、今でこそ100年以上の（歴史を持つ）クラブがたくさんありますが、当初はサポーターの力なしに存在できなかったクラブが多いです。

ブラジルでは勝利給、勝利ボーナスのことを、ポルトガル語で家畜という言葉で表現するのですが、これは1920年代とか、まだプロ化されていない時代に、パトロンたちが選手たちを支えようと牛や馬を勝利給の代わりに渡していた経緯があります。そういった由来から、家畜という言葉イコール勝利ボーナスとなりました。

日本でもJリーグの横浜フリューゲルスが吸収合併で消滅したという悲しい歴史がありますけども、ブラジルでもやっぱり、クラブが無くなったり合併したりというのは今でも繰り返しあり、色々なクラブが消滅の危機に瀕したことがあります。

サッカーというのは思わぬトラブル、何かしらのトラブルがつきものです。日本でも皆さんおなじみのクラブ、パルメイラスとかクルゼイロとか、名前ぐらいは聞かれたことがあると思うのですが、こうしたクラブは元々はイタリア系の全く違う名前、イタリアの運動場みたいな名前でした。

第2次世界大戦が起きてしまって、連合国側のブラジルはイタリア、ドイツとは戦争をしている国という関係でしたから、敵国のクラブ、名前を語るのはいかんということで、一時期そうしたクラブの存在が危ぶまれたこともあったのですが、名前を変えて生き残ってきたみたいです。

あとは、クラブ、サポーターが資材を持ち寄ってスタジアムをつくったりということもあったようです。日本でもおなじみの、ブラジルのインテル・ナシオナル。クラブ・ワールドカップにも来たクラブですけども、ここは日本代表の監督をされたファルカンさんが、小さいときにスタジアムの建設現場でボランティアで働いたそうで、レンガとかセメントを運んで手伝ったというような歴史もあります。サポーターとクラブは本当に二人三脚良い時もあれば悪い時もあると支え合う存在なんですね。

Jリーグはまだ始まったばかりですし、どちらかというとまだスポーツというか娯楽の域を出ていないところが若干あると思います。選手にしても、本当に身近な存在なのか……。当然、憧れの存在であることは大事だと思うのですが、社会貢献という点においても、やはりJリーグはまだ不足していると正直思います。

ファンサービスにしても、僕が取材しているあるクラブ——あるクラブといっても名前は分かってしまうのですが、子どもさんたちが日頃、春休みなどにスタジアムに練習場を見に来て、サインを待っていても、選手たちはフィジカル練習があるからと帰っちゃったりして……。子どもたちは悲しい思いをしている。サッカーが本当に身近に、文化として根付いていくためには、選手が日頃から身近なところにおりていくことも大事だと思います。

ブラジルの場合——ブラジルが全て良いと評価するわけじゃないのですが、本当にメジャーな選手、例えばバカーとかヨーロッパで活躍しているようなセレソンの選手も、家族と過ごしたい一番大事なオフ、短いクリスマスのオフにわざわざ母国に帰って、例えば小児ガンの病院をサンタの格好をして訪れたり、生まれたスラム街に——ブラジルはスラム街出身の選手も多いですから——自分でトラックを用意して、おもちゃを満タンに積んで行って貧しい子どもたちに与えたり、日頃からそういった取り組み、社会貢献という概念がしっかりあります。

今回、Jリーグも日本のために、まあ地域密着を考えているJリーグでは当然だと思うのですが、そういう動きがあるのは本当に素晴らしいことだと思います。逆に、ブラジルの方たちは先ほど言ったような気持ちを忘れていないから、先日、ブラジルのクリチーバという街でジーコやドゥンガなどかつてJリーグと縁のあった選手がチャリティマッチをしたのですね。チャリティマッチがあったことはみなさんもニュースなどでお聞きになっているかなと思うのですが、その中でドゥンガは、「人を助けるということは僕らの義務だ、こういった社会貢献は我々のキャリアの一部に組み込まれているのだ」ということを話していました。引退してもなおかつ、何か困った人たちがいれば彼らはすぐに動く。もちろんノーギャラです。

今回、チャリティマッチが取り上げられていますけども、ブラジルというのはそういうチャリティマッチ、草サッカー的なことをわりとすぐにやりますね。何かの災害や自然災害があればすぐに、年末のオフなど本当に短い、過密日程の中でのオフを利用して、友だちチームをつくったりしてやっています。ブラジルの場合一般的に、お金を払っての収益、入場料ではないのですが、乾燥した食物、米やパスタを入場料代わりに交換するというイベントを本当に身近にやっています。そんなこともあって、ブラジルはサッカーが文化として根付いている。選手たちもクラブも、困ったときにサポーターに支えられてきた歴史があるので、選手たちは日頃、より身近なところでサポーターや社会に貢献しているのかなという気がします。

幸い、自分もJリーグを取材させて頂いて、こうした環境で働けることを誇りに思うのですが、例えば関西だったらガンバですとか、阪神大震災の日が練習初日だったという経緯を持つヴィッセル神戸が素早く反応して親善試合をしたり、京都とセレッソもチャリティマッチをしました。復興というのは簡単なスパンじゃないと思うので、そうした取り組みを一過性にしないことですね。サッカー選手が単にお金を集めることも大事ですし、それから被災地の子どもたちがサッカーをする手助けなどに日頃から取り組んでいけば、いつの日か、日本が「サッカーの国」といわれるように、文化が根付いていくのかなと思います。

まずはサッカー界、スポーツ界が被災地を助けていくのですが、スポーツというのは経済的なおおいを受けたりするので、逆に、サッカー、スポーツ界がサポーターの皆さん、一般の方の手助けなしにやっていけないという状況がくるかも分からない。そういった意味でも、今回の震災というのはサッカー界にとっても、単にサッカーを見せればいだろうというものじゃないと思います。日頃の取り組み、社会貢献。社会的影響力を持つ人だからできることもあると思いますし、そうした取り組みを継続してやっていって頂きたいですし、僕らも取材をして、足りないところは批判、批評もしていきたいと思います。

こうした場でお話をさせて頂くことも非常にありがたいことです。日常レベルでスポーツを通じてやれることが、それぞれの立場で色々何かあると思うので、そういったことをやっていければと思っています。とりとめの話で申し訳ありません。以上です。ありがとうございました。

---

#### ◆永田淳

本多：続きまして関西の4クラブで取材活動をされています、永田淳さん、よろしくお願ひします。

永田：こんばんは、ライターの永田淳といいます。よろしくお願いします。僕もまず簡単に自己紹介をさせていただきます。

今はフリーのライターで、主に関西のJリーグの4クラブを取材して書いたりさせてもらっています。もともとは関西出身ではなくて、実家は岐阜で、高校まで名古屋の学校にいて、大学のときに東京に行って、就職活動をして、その配属が大阪になって、大阪で3年半、商社で働きました。その中でサッカーの仕事をさせてもらう機会があって、ずっと並行しながらやっていたのですが、そのうちにどっぷり（サッカーの仕事を）やってみたいと思って、周りには血迷ったといわれましたが、（会社を）辞めて、今に至るといったところです。

今回、チャリティ書籍で声をかけて頂いて、「サッカーのチカラ」というテーマ、漠然としてはいるかもしれませんが、何を書こうかなと思ったときに、自分が書けそうなこと、やれそうなもので探してみたら、ヴィッセル神戸というクラブでした。

ヴィッセルは僕が一番最初に取材させてもらったチームで、そこは先ほど下菌さんがおっしゃったように、チームができて、その始動の練習が予定されていたのが95年1月17日でした。震災とは切っても切り離せないというか、それが今も続いているクラブなので、そこについて書かせてもらうことにして、今まで見てきたこと一見してきたといってもサポーターからしたらまだ短い期間なのですが、選手と触れ合う機会もあるので、選手に話を聞いたこと、追加で関係者に話を聞いたりして書きました。

ヴィッセルというのはいつも何か、始動日には今でも震災の映像を見たりしています。地元出身の選手でも実際にそんなに大きな被害を受けた選手はいないので、そういう活動をクラブとしてやってきたことが大きく残っているなということ、今回感じました。それは今までも感じていたのですが、何というか、そういうことを知ってはいても、なかなか、こちらとしては実感することはなかった——という感じでした。

それが今回、地震が起きて、すごく動きが早かった。皆が自分たちのことのように動いているのを見て、そういうことを背負っているクラブなのだ、クラブとして打ち出しているだけでなく、それが選手にも浸透して、選手がそうした責任感のもとでプレーしてきていたのだ、知ることができました。

(95年の)震災当時はクラブが出来たてで、まず、クラブがやれるのかどうか、このまま潰した方がいいのじゃないかという話もあったと聞きます。そういう中で色んな人が動いて、色んな人の思いがあって存続して、1年目はJリーグに上がれなかったけれど2年目に昇格を決めました。最後の昇格が決まる試合には、ユニバーに本当に大勢のお客さんが集まって、2万4,000人でしたかね、後押ししてくれたそうです。今回本にも書かせてもらいましたが、試合のチケットは（タダで）配ったものじゃなくて、皆が自分でお金を出してチケットを買って（来て）くれた。チケットを買うのも、生活がままならないような人も中にはいたと思うのですが、それでも、そこ（試合）に行ったら希望をもらえる——ということを書いてきた人もいと聞きました。

そういうことができるというのはスゴイなど単純に思いましたし、そういうものを背負ってやってきていることとつながっているのだと今回思いました。

地元のクラブだからやれることはたくさんあるのかな、と。今回も、仙台とか鹿島、水戸といった関東・東北のクラブは被害を受けていると思うのですが、今実際、表には見えないところで色んな人が動いているだろうし、今後、そういう人たちの力で進んでいくのだと思います。

この前の日本代表とJリーグ選抜のチャリティマッチも、すごい勇気を与えるような試合だったと思いますが、やっぱり、自分たちの近くで生活していたり、避難所に来てくれるような選手たちのことはもっと応援しやすいと思いますし、そういう苦しい中でチームが頑張ることで、それに自分を重ね合わせるというか……自分も頑張ろうと思えるのかなと思うので、地元のクラブだからできることをやっていってほしいなと思います。

今回本に書いたことで言えば、鹿島、水戸、仙台からすれば、ヴィッセルが目標になるクラブだと思ったことは多分一回もないんじゃないかな、と。まあ、ヴィッセルはJ1に定着……定着はしてませんね（笑）。定着はしていませんけど、J1にはいる。けれど、直接聞いたわけではありませんが、鹿島なんかずっと強かったし、（ヴィッセルに対して）「このクラブみたいになりたい」ということを思ったことは、そんなにないんじゃないかなと思います。そういう対象にヴィッセルが今なっているのは、それはそれですごいことなのじゃないかなと思います。

ヴィッセルは阪神大震災があったことを大事にしているクラブではありますが、だから周りがそれを気遣

って試合をしているかというところではないと思います。被災したクラブは今後、最初はなかなか厳しいスタートになると思うのですが、そのあたり、鹿島にはやっぱり「何か分かんねえけど強えな」というチームになってほしいし、仙台にもそうなってほしい。実際にそうならなったら、関西の取材をしている側からしたら嫌なのかもしれないですけど、そう思わせてくれるぐらいになってほしいなと思っています。

そうした「サッカーのチカラ」を感じるとともに今回思ったのは、やっぱり、サッカーを通じた人々、仲間のチカラ。クラブがまとめているから広がりやすいということもあると思うのですが、サポーターの方々でも、他のクラブ、仙台のサポーターに知り合いの方がいることもあるでしょうし、僕らでも、向こうで取材をしている仲間を知っていたりするのだから、そういう人たちのために何かをしたいと直接思うようになったのも、サッカーがあったからだと思います。そういうのがなかったら、仙台に知り合いなんかいなかったかもしれないと考えると、色んなところで関わっているなと思います。

自分が何ができるかはよく分からないのですが、何かしらできることがあればやりたいなと思うようになったのも、ヴィッセルというクラブ取材しているからだったり、サッカーで知り合った人がいっぱいいたりするからで、そういう人々のつながりというのは今後も変わらないと思いますし、そうしてサッカーが与えてくれた色んなものは今後もどんどんチカラになっていくのじゃないかと、日々思っているところです。以上です。ありがとうございます。

---

## ◆草葉達也

本多：4人目、最後になります。サッカーというよりはフットサルのチカラになるかもしれませんが……。フットサルがあったから今この方はここにいる、という面白いエピソードを持っている草葉さんです。

草葉：どうも初めまして、オスカル草葉という名前で色々やらせてもらっています、作家の草葉達也です。よろしくお願ひします。こういうところでサッカーの話をしてもらうのは非常におこがましいというか、できればそちらの聞く側に座っておいたかったなと、今日つくづく思いました。どんな話をすればいいか、本当にここへ来るまで全然何も考えていませんでした。

私自身がサッカーを始めたのが、40（歳）をこえてからです。今は47、もうすぐ48になるのですが、40歳のときに小学校の保護者の方に誘われて、小学校でサッカーの指導をすることになりました。サッカーの指導といっても対外試合とかは全くなくて、昔でいう少年団の学校版みたいなものです。とにかくサッカーを楽しもう、サッカーを好きになってもらおうということでした。だから指導者も、学生時代にサッカー経験のある方々ばかりだったので、私は40までサッカー経験ゼロです。

というのも、私の世代は野球世代、王・長嶋ですので、やっぱり野球中心でした。学校にもサッカーボールがあったのか無かったのか……という感じです。ドッジボールはあったと思うのですが、多分蹴ったら怒られていた世代だと思います。で、サッカーをしたかな？と考えるとちょっと疑問に残るような、それぐらいしか、サッカーの経験は本当になかったのですが、とりあえず子どもが好きだったので、指導者といいますが、コーチング、本とかビデオを見て小学校1～6年まで見ることになりました。

ただ、私はサッカー経験はなかったのですが、当時、体重が、40歳のときはちょっと痩せてましたけど、このとき100キロあるかないかぐらいでした。

というのは、神戸の阪神大震災のときにうつ病になりました。作家という職業柄色んなところを見ているうちに、「大好きな神戸の街がこんなに酷くなった。自分はその中で生かされている、何かをしなければならぬ」ということがずっと頭の中に残ったんです。そういう原因だと思うのですがもううつ病になってしまひまして、そこから過食症に、食べては吐き、食べては吐き——という形で、最高105キロまでいきました。

サッカーの指導を始める頃は90キロ台だったと思うのですが、サッカー経験もなく太っているので最初はお断りしたのですが……「一度やってみたら？」という妻の言葉、今は言ってくれないような（笑）妻の温かい言葉が昔はありましたので、じゃあやってみようかということで始めました。

ただ、実際にやってみると、本とかビデオを見てコーチングはできるのですが、実技が全くできないんです

よ、サッカー経験がないですから。シュートはするとしてもトーキックしかできないですし、パスも子どもにもちゃんと返せないような状況でした。これでは恥ずかしいなというところに、ヴィッセル神戸さんの——またヴィッセルの名前が出てきますが——大人のサッカースクールができました。

これは仕事を持った人が夜、仕事帰りにちょっとサッカーをできればというようなことで、元ヴィッセル神戸の加藤寛さんが考えたと聞いております。それもちょっと行こうかどうか悩みました。僕は元々ヴィッセルファンでしたし、ヴィッセルの名前をつけるときの有識者会議みたいなものにも呼ばれていたもので、ヴィッセルはずっと応援していました。ただやっぱり、大人のサッカー初心者といっても、多分ほとんどの人が中学高校で経験しているだろうなと思いました。そういうのもあって、ちょっと悩んだのですが、なんとか第1期生として入ったのが41歳でした。

このときに入ったのはいいのですが、私は小学6年のときに両眼、円錐角膜という角膜が尖る進行性の病気になりました。当時は治療が確立されていまして、当時で10万人に一人、今で1万人に一人という難病なんですけども、それが進行したせいで30（歳）ぐらいまでには右目はほとんど見えなくなりました。現在も右目はもちろん見えません。全然見えないわけではなくて、光とかは分かります。左目はコンタクトレンズを入れて0.7ぐらいはありますので、ほとんど左目だけで大人のサッカーに入りました。最初はかなりきつかったです。太っていましたし、サッカーも全然知りませんでしたから。フットサルコートでやるサッカーでしたから、やはりオフサイドもありましたし、加藤さんも厳しい方ですから戦略的な事も色々おっしゃるのですが、なかなか理解できずにいましたが、1年間で約10キロぐらい痩せました。もともと運動神経もあったんだろうと思いますけど、ゴールも決められるようになって、段々面白くなりました。

そのときにちょうどデウソン神戸、Fリーグが始まりまして、プレスで見るようになりました。そうして「フットサル面白い、やってみたい」と、今度はデウソンの個人会員に通うようになります。その頃には体重も減っていきまして、うつ病も、薬はずっと飲んでいたので、睡眠導入剤がなければ眠れなかった人間がサッカー、フットサルのおかげで（薬がなくても）眠れるようになりました。体重もどんどん減りました。トータルすると35キロは減ったと思います。

Fリーグ、フットサルのプレーを色々見ているうちにもっと上でやりたいなという気持ちになりましたけど、年がそのときで44、45ぐらいだったので、どこか（チーム）に入ってということは全然考えませんでした。

ところがサッカーの方でちょうど、神戸レガッタ&アスレチッククラブという、日本でサッカー発祥のクラブといわれているクラブのサッカー部から入らないかという誘いがありました。子どものときからレガッタのことは知っていて、そこでサッカーをしている人たちを見ていたので、少し憧れもあったので、そこへ入れて頂いて、サッカーはチームでやっていました。

フットサルは個人参加という形でやっていたのですが、昨年6月、47歳のときに関西リーグのMESSE OSKA DREAM（メッセ大阪ドリーム）というチームに最年長47歳で入れて頂きました。背番号4番を頂きました。実際はおまけのような、話題作りのような入団で客寄せパンダというような感じで入れたのかもしれませんが、私が入ることでフットサル、サッカーがマスコミの話題になればと。最終戦には5分ぐらいですけど出してもらいましたし、他のカップ戦なんかは常時出させてもらいまして、ゴールこそまだですけどもシュート機会は何回もあります。

一緒にやっているメンバーには、サッカーの全国大会で準優勝したチームの選手や、元Fリーグの選手がいたり。そういうところでやらせてもらっているので、練習も本当にきついです。私ぐらいの年代になると、体型を維持するだけでも大変な年代だと思います。友達もすごいお腹をしています。ちょっとローソンに行くのにも車まで行くような人ばかりなので、僕の体を見ては「すごいな、すごいな」と言ってくれるようになりましたね。

私はうつ病のときは半年間くらいは家の中で寝たり起きたりという感じでしたので、まさか人前で、サッカーのほとんど知識がないような話をさせてもらうようになるとは思いませんでした。今はインターネットテレビやFMのレギュラーもあります。ただやっぱり、サッカーで始まり、もちろん今も好きでやっています。フットサルも週に何度か練習しています。本当に、サッカー、フットサルがなかったら、私はもしかしたらここにいないかもしれません。

今回の地震は東京で、代々木で取材中に地震が遭いました。神戸で震災に遭いましたので正直すごく怖かったです。ただ、やっぱり長い間で色々精神的にも強くなったのでしょう。今回、地震の怖さを乗り切ることができました。もしもサッカー、フットサルをやっていなければ、私は今回の地震でまた、同じうつ病やパニック障害のようなことになっていたかもしれません。

私は「One Goal! One Heart!」という1ゴールにつき100円という募金活動を3年ほど前からやっています。現在、日本中に色んなサッカー、フットサルのチャリティ活動が根付いてきているのを見て、僕も本当にやってきて良かったなと思っています。サッカー、フットサル、本当に日本を元気にするためにはスポーツの力が絶対必要だと思います。私ももちろん頑張っていきますので、ここにおられる皆さんもどうか頑張って、子どもたちの指導だとかチャリティに関わらず、今皆さんがやっていること、サッカーに関わることを頑張ってやってほしいなと思います。ありがとうございました。

---

## ◆賀川浩

賀川：実はこの本のことは私も編集者から誘いを受けたのですが、私はもうあちこちに書いていたのでね。新聞記者のはしくれを60年ほどやっていたので、いっぺん書いたものや喋ったものをまたどこかに、似たようなものを書く習慣がなかったのですから、今回はお手伝いなくて、この本は失礼しました。

今日は先ほどから、いいお話を聞かせて頂いております。外国の経験がある方は、外国の連中は長い目で見てやってきたとか、ヴィッセル神戸というクラブの中から掴んだお話、色々いい話を聞くことができました。

私自身は、あと4年経ったら90（歳）になります。昭和13年には神戸で大水害に遭い、裏山が崩れて神戸の街が土砂に埋もれ、今の三ノ宮駅の前からフラワーロードに至る辺りがずっと川になるのを見ています。これは昔の生田川、源平合戦の頃の地形です。あのとき、神戸は源平合戦の頃に帰るのかなと思ったのですが、3ヶ月ほどしたらすっかりきれいになりました。このときも阪神間だけの大水害でしたから、東京の人は全然知らないし、大阪の方もほとんど知らないですね。

それから、軍隊に行っている間に神戸の大空襲で家が丸焼けになりました。3月に西神戸の方がやられて、東神戸は6月にやられました。復員して帰ってきてから我が家を見に行くと、コンクリートの柱が2本建っているだけで、あとは玄関にはあってあったものすごく厚いガラスが雨のように散っていました。私の家は東神戸の熊内（くもち）に家があったのですが、東神戸から三宮まで何もなくなっていた。まったくの焼け野原。三ノ宮駅は焼けても高架戦は残っていて、東神戸の我が家の焼け跡から三ノ宮駅まで一軒も家がなくて見通せて、絨毯爆撃で、浜に近い方の軍需工場は爆弾で、西から焼夷弾でずっと燃やしてきた作戦のとおりだなと思いました。

それから、関西に住んでいましたから、台風はしょっちゅう経験しました。私どもの新聞社の編集局長をやっていた湯浅さんというのは昔、読売新聞にいたとき、「台風Uターン」という素晴らしい見出しをつけて新聞界の話題になりました。神戸に台風が来て、通り過ぎて東へ行くのかなと思ったら大阪湾で戻ってきたのを、湯浅さんは自動車のUターンになぞらえた。

まあそれは別として、1995年の阪神大震災も経験しました。ちょうど70をこえたときで、ぼつぼつ、サロンみたいなものをつくって、買いためたスーベニールや本などを見てもらいながらサッカーの話をしたらいいなーと、芦屋の駅に近いところに事務所兼書庫を借りていたのですが、1階が自動車置き場になっているそのマンションが、車の上に座り込んだ。

新潟の地震より前にできた建造物で、いわゆる帯金の間隔が短かったんですね。30センチにせなイカンののが、50センチか70センチの昔風の建物だったものですから、脚が折れてしまった。私はその4階で寝てまして、「今日はメ切の日だからそろそろ起きようかな……まだ5時やしどうしようかな」と思っているところへグラグラと揺れて、ドスンと落ちたのを覚えています。

これは自分の計画もちょっと、いわゆる人生の晩年の計画をストップせざるを得ないことにもなって、なかなか辛かったのですが、そういう色んなことを経験しながらも、おかげさまで体は丈夫で、傷つくことなくやってきました。

色々経験して、その都度、感心したのは、色々なことがあるけれど、人間はすごいなということです。すごいからこそ逆に、すぐ復旧してすぐ忘れてしまってもう一つ酷いメに遭う。今度の震災は……本当は阪神大震災でずいぶん大事な経験をしたんですよね。しかしそのことがほとんど、東京、中央、東京に伝わっていない。

昔、スポーツのイベントを新聞社でやっていたときには、スポーツというのは、とにかく元気な者がやるのだ

から、そういう元気な者は、体の弱い方、スポーツがやれない方に対して何らかの応援できることがあったらすればいいという趣旨がありました。私は、会社でスポーツイベントをするときは、ユニセフのチャリティマッチとしてやりましたし、ランニングのイベントもユニセフでやりました。サッカーもユニセフで、日本協会を通じて寄付したことがあります。

スポーツ人というのは、自分たちがそもそも比較的健康で丈夫なのだから、そうでない人に手を差し伸べることができる場合があればやろう——というのがヨーロッパあるいは南米、キリスト教では、昔からずっと当たり前ということが多くですね。

1977年にバイエルン・ミュンヘンの試合を見たときなのですが、試合前、ベッケンバウアーとゲルト・ミュラーがピッチへ出て行くと思ったら、ボールを手にしてこちらへ歩いてくるんですよ。すると観客がいつせいに拍手しました。何かと思ったら、車いすの子どもたちが出てきて、彼らにベッケンバウアーとゲルト・ミュラーがボールを一人ずつ手渡したのです。

あとで聞いたら、シーズンのうちの何回か、子ども達を招待してサッカーを見せてやる日があるそうで、僕が行った日がちょうどその日だったのですね。だから、バイエルン・ミュンヘンのオリンピックスタジアムには、当時すでに車椅子が置ける場所がスタンドにできていました。そういうことが彼らにとっては当たり前。元気で、しかもスポーツでスターになって、収入も取れている者にとっては、そういうことが一つ、考え方にあるわけです。

ですから、日本で大震災を見たときに「それはえらいこっちゃ」と、日本に関係のないようなヨーロッパのクラブでも色んな催しをしてくれました。これは彼らの長いスポーツ人の伝統からきている。

アメリカの野球の連中でもそうです。昔、中南米で大震災があったとき、アメリカの野球選手が自分で飛行機に救援物資を積んで、飛行機が墜落して亡くなった話があります。大リーグには、その選手の名前を冠した基金があります。

サッカーに限らずどこでも、スポーツマン、特にプロフェッショナルのスポーツ選手で、恵まれた素質、体を持ち、比較的恵まれた生活をしている者はそういうことを当然の仕事と考えているようです。

彼らの面白いのは、この間、大リーグのどこかのチームがやっていたけどね、あんまり気負いもなく淡々と、「プロフェッショナル・ベースボール、メジャーリーグという娯楽を楽しんで下さい」と言っている。こういう非常にあっさりしているところが、アメリカらしいなと思いました。

ただし、だからといって大したことではないというわけではありません。1995年の大震災からちょうど16年ほど経っていますが、その間に日本のサッカーというものが非常に大きく変化しました。よその国へ出て行って、例えば98年のW杯のときには1万5000だけ2万人もの日本人がフランスのスタンドで君が代を歌った。1945年の敗戦以来、それまで日本にはそんな習慣はなかったのです。国という言い方が良いのかどうか分かりませんが、国というのは自分たちの身近なところで一番大きな単位ですよ。神戸より大きいのが兵庫、兵庫より関西、関西よりさらに大きいのが日本と、そういう感覚で日本というものを捉えているのだらうなという風に私は思いました。それはひょっとすると、サッカーが盛んになって、サッカーを通じてそうなったのかな、と。

今から30年前に団体でグラウンドで君が代を歌うといえば、日教組がどういったか分かりませんが、日本中、喧々諤々、賛否両論あったと思います。しかしヨーロッパや南米へ行って試合前に、相手の国は国歌を歌っているのにこちらが歌わない方がおかしいわけですよ。ごく簡単に一つの地域として、日本であり国歌を、受け取るようになったという感じがしました。

阪神大震災のときは、イチローなどがいたプロ野球チームが、「頑張ろう神戸」という標語で頑張りましたよね。それが今度は期せずして、メディアも誰もが「頑張ろう日本」という言い方をしたのは、サッカーが社会現象になってきたせいかなと密かに考えています。そんなことでございます。どうも。

本多：実際に本を購入されている方で感想などあれば……

---

#### ◆山本真也

購入したといっても昨日ダウンロードしたばかりでまだ何とも言えないんですけど……今日参加される4人の方の分はひととおり読ませて頂きました。まだ全部読んでいないので本当に何とも言えないんですけど、これだ

けの方が集まるということもないので、購入させてもらいました。

個人的には、今、会社を経営しているのですが、一人でやっています、ボランティアはなかなかできません。今思っているのは、普段と変わらず仕事をして、より利益を上げてそれをまた、募金やチャリティに生かすことができればいいかなと思っています。是非皆さんも買ってみてください

本多：ありがとうございます。ぜひ皆さん、購入して頂けたら……。

では賀川さんの隣、今日は当然日本の話を中心なのですが、南米通のセニョール佐藤さんと、その隣の、イングランドから来たベン君と、せっかくなので一言ずつ。

---

#### ◆セニョール佐藤（佐藤英男）

佐藤：皆さんこんばんは。多分、初めましてという方が多いと思うのですが、今日は本多さんから紹介して頂いて、パネリストの話を知りたいとお邪魔しています。

関西弁がしゃべれないので標準語だけで話しますが、本多さんからご紹介頂いたとおり自分自身は海外ばかり行っていました。行っていないのは南極大陸だけなので、ヨーロッパもアジアも中南米も、たぶん皆さんより多少経験が深いかなと思います。さっき賀川さんがおっしゃったことに私も共通、共感します。

自分自身は読売クラブからヴェルディ、そこからレッズ、ヴィッセルと、今は所属はないのですが、サッカー関係の仕事をして頂いています。どこから移るときでも、いい意味で人的弊害、歴史的弊害があったのですが、海外のサッカーは全部、コミュニティから始まっています。

皆さんもよく耳にするとと思うのですが、フラメンゴがトヨタカップで優勝すると、フルミネンセとかボタフオゴといったリオデジャネイロのクラブは非常に悲しみます。逆に負けると大喜びしてお祭り騒ぎになります。これはヨーロッパも一緒なんですね。日本がそういうところがあるかという、まだそこまでいっていません。

僕は賀川さんよりだいぶ年が若くて、まだ還暦前なんですけども、自分たちも競技場で国歌を歌うという習慣はなくて、高校や大学のときに校歌を歌うことにも反発していたジェネレーションです。そういうコミュニティから始まったサッカーが、賀川さんがおっしゃったように「頑張れ日本」と、「日本」になりました。

もう少し先を進めると、スペインだとかスコットランドでユニフォームに片仮名で選手名を入れたというのがメディアでよく報道されているのですが、実は南米でも「頑張れ日本」と日本語で書いているし、ポルトガル語でも英語でも、コリンチャンスもフラメンゴもやっています。そういう意味では、こういう人災ではなく大変な災害で、多分世界中の人が日本を応援しなくちゃいけないということになった。だから僕は、「頑張れ日本」のその後に、「頑張れ世界」とか「頑張れ地球」というのがあるのじゃないかなという風に、最近感じるようになっています。

これは多分ベン君がしゃべると思うのですが、そこを先に僕がおちよくっておきます。

イングランド・リーグの歴史は1888年からですが、車が開発されてからどんな小さなスタジアムでも、スタジアムの中、ピッチの横に障害者の車を置くスペースを必ず設けていました。それは最初にイングランド・リーグがやったと思います。

要するに、人を愛するという言葉を平気で態度で示せるというのが、おそらく、サッカー、スポーツの持っているアドバンテージだと思いますし、それがやっとな日本にも、不謹慎ですが、災害のおかげで日本人全体がそれに気づいたのじゃないかなという風に感じています。

---

#### ◆ベン・メイブリー

ベン：みなさん、こんばんは。イギリスから来ましたベン・メイブリーと申します。Football Japan、日本サッカーアーカイブをはじめ、フリーランスの翻訳者として活動しています。

イギリス人は「サッカーのチカラ」を毎週、当たり前のように感じていることが多いので、イギリスの新聞を読むとバックページは必ずサッカーのことばかり書いています。文化、カルチャー欄というのがありますが、そ

これはサッカーというより作家、小説、劇の話がいっぱい書いてあります。

これを僕は、個人的にいつも不思議に思っています。何故かというと、僕はカルチャーという英語の単語を聞くと、その国民が何をやっているかをまず考えます。イギリスでは小説を読んでいる人も多いし、実際に劇場に見に行く人も多い。逆にサッカーは毎週土曜日 3 時から必ず、何百人が見に行っているわけです。スタジアムに行けなくてもテレビで見たりするので、皆がやっていることとして、サッカーに匹敵するものはないのじゃないかと思えます。それはイギリスだけじゃなくて世界中、21 世紀のカルチャーとして、サッカーに匹敵するものはないかなという風に思っています。

一方で——。イギリスでは震災、地震を感じることはまずないです。震度 2 の地震でも、ちょっと揺れるだけでも滅多にないことですから大きなニュースになります。

私が初めて関西、日本に来たのは 2001 年、大学 1 年生で 18 歳のとき。関西学院大学への留学で西宮に来ました。イギリスでは 1995 年の震災のことはもちろん報道されたし、中学 2 年だったから報道されていたことはよく覚えています。向こうでは阪神という言葉は通じないので、「Kobe Earthquake」。

実際に西宮に来て、西宮は神戸に近いのだなと思いました。ホスト・ファミリーに、「このビルも潰れましたよ」「あそこの新幹線も落ちましたよ」といわれて、僕は「6 年前の話だよな？」と驚きました。イギリスだったらまだ電車でも走ってないと思います。地震の跡はほとんどなくて、地震があったことは、言われてみないと分からないほどでした。

大阪外大の留学も終えて、6 年ぐらいずっと大阪に住んで働いてますけど、この間の地震は日本にいて初めて経験した大きな震災でした。日本の大企業で働いた経験もありますし、その中で日本の経営のやり方、仕事のやり方、一緒にやろうとか見た目のためとか色々外国人として不思議に思うこともあります。文化の違いも色々あります。

でも今回本当に、この震災を受けて日本国民が一つになって、できることをやっていこうという気持ちはどこに行っても一目で分かり、なんだか感動しました。今も感動しています。イギリス人はなかなかこういうことがない。

関西は阪神大震災の経験もありますけど、今回は被害はなかったですね。東北のために本当に頑張りたいと、言葉で言うのは簡単ですけど、本当に動いているのを見ると、外国人として感動します。この間の Team as One の試合も取材させて頂きましたけど、人生で何百試合、何千試合と見ている中で、あんな試合は初めてでしたね。皆さんも同じだと思うのですが、本当に日本はすごい国だなと改めて思いました。

本多：ありがとうございます。日本のことを誉めてもらって気分良くなったところで、ひとまず前半終了ということにしたいと思います。

#### ◆編集長：中林良輔コメント（寄稿）

チャリティー電子書籍「サッカーのチカラ」を編集させていただいた東邦出版の中林です。この度は「サッカーのチカラ」をテーマにこのような意義のある会をご開催いただき心から感謝するとともに、尊敬する賀川浩さん、ご執筆者（この会ではスピーカー）の皆様にご挨拶できる絶好の機会に駆けつけることができず大変失礼いたしました。

私自身、18 歳までを神戸で過ごし、阪神大震災も経験しました。とはいえ当時はまだ小学生でただただ周囲の皆さんのご好意を受け入れる立場でしかなかっただけに、今回の東日本大震災では微力ではあってもなにか被災地のチカラになれないかと考え、チャリティー電子書籍企画をはじめ様々な取り組みを行っております。いまでもそういった活動がどれほど意味のあるものなのかというのは自問自答の毎日ですが、少なくともチャリティー電子書籍「サッカーのチカラ」の存在がこういった素晴らしい会を開催するきっかけの一端を担えたことを心からうれしく思います。

被災地復興のためのチャリティー電子書籍「サッカーのチカラ」発売中

<https://hon-to.jp/asp/ShowSeriesDetail.do?seriesId=B-MBJ-20644-120014011-001-001>

ご利用明細

このご利用明細は必ずお持ち帰りください。

年	月	日	お取扱い店	銀行番号	口座番号	口座種別
23	05	06	0005	218	0102	
*** **						お取引金額
*** **						お振り込み
*** **						¥91021*
お 客 さ ま へ						
税込手数料	¥315*	おつり	¥685*	1045		
お振込先	三菱東京UFJ銀行					
	渋谷支店					
	普通 0290451					
	サイ)ニホンツカキョウカイ様					
ご依頼人	ワロン2002様					
	09038607152					
	印紙税					

三菱東京UFJ銀行をご利用いただきありがとうございます。



三菱東京UFJ銀行